

児童生徒の国際性の育成に関する研究

— 児童生徒の意識調査の分析を中心として —

国際理解教育研究会議

菊池武熙¹ 宮本光代² 佐々木昭夫³ 森登美夫⁴

要 約

昨今の国際情勢の中で日本に対する期待は非常に高まり、その役割は重要性を増している。しかし、一方では日本人に対して国際性のなさを指摘する声も多く、国際性豊かな、心豊かでたくましく生きる日本人の育成が大きな課題となっている。

この研究会議では国際性ある子ども像を①視野の広い子ども②ちがいを認めて理解し合える子ども③主体的に自己を主張できる子どもという三つの視点でとらえ、川崎市の小・中学生1,659名に対し、アンケートでその実態と問題点を調査した。

その結果、子どもたちは外国に対しても、日本に対しても知識豊かで関心も高い。特に小6、中1の段階での意欲的な実態は特筆されてよい。しかし、実践的な態度面では大変消極的で、他人と一緒にならという集団志向の傾向が至るところで見られる。自主自律、責任感、思慮深さ、反省心、向上心、公正さ等道德性に関わる項目でも曖昧にしか自分の考えを述べられないという傾向が見られた。

これらの実態を踏まえて、今後は教育活動を国際的な視野に立って見直し、効果的な教材配列を考え、系統だった国際理解教育を実践することが重要な課題となろう。

キーワード：国際理解教育，国際理解，国際性，日本文化，外国文化，外国語

目 次

はじめに	6. 調査の概要	112
1. 研究の主題	7. 調査結果の考察	113
2. 主題設定の理由	8. まとめ	124
3. 研究のねらい	9. 今後の課題	125
4. 研究の構造	おわりに	
5. 基本的な考え	参考文献・指導助言者	

¹ 川崎市総合教育センター指導主事

² 川崎市立今井小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立長沢小学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立宮内中学校教諭（研修員）

はじめに

新聞紙上には殆ど毎日のように国際化という文字が見られる。事実、交通・通信手段の発達、経済、文化交流の拡大に伴い、地球は急速に小さくなってきており国際社会はますます相互依存の度合いを深めている。世界有数の先進工業国となった日本に資源、エネルギー、産業、教育、文化などいずれの分野をとってみても、国際社会の中で孤立して生きていくことはできない。今、我が国は国際社会の中で、その地位に相応しい国際的責任を分担することなしには発展を続けていくことができないという新しい国際化の時代に入ってきた。

過日の新聞の世論調査によると、日本の首相たる第一条件として戦後初めて「国際感覚」が第1位を占め、しかも国民の^(注)半数がそれを挙げているのは注目に値することである。国民の目も世界に向きつゝあることがうかがえる。

昭和61年末日現在、川崎市には68ヶ国から4,557世帯、11,180名の外国人が居住しており、海外生活を1年以上経験した学齢の帰国児童・生徒も78ヶ国から1,500名にも上っている。

世界のいろいろな国の文化、風俗、習慣を身につけた人々が我々の周囲に確実に増えてきた。お互いに平和のうちに共に生きていくには理解しあうことが必要不可欠である。異なるものを忌避し排除する傾向を今こそ払拭し、異なるものへの関心と寛容を培っていかなければならない。

従来、我が国の国民性として画一性、硬直性、閉鎖性が指摘されてきた。人と人との交流が以前とは比較にならないほど活発化している現在、いつまでも自分のまわりだけを中心とした物の見方、考え方をしていたのでは国際社会に貢献することはおろか国際社会の一員としての責任を果たすことすらできない。

国際理解教育の必要性が叫ばれて既に久しい。確かに知識としての情報は溢れている。しかし、振り返ってみるに、これまで我々はどれだけ世界に目を向け、どれだけ心を世界に開いてきたか。未だに乏しい価値感に抱溺している面が残されているのではなからうか。今こそ、心を開き、視点を変えて世界を見る必要を感じざるを得ない。今改めて国際社会の中に生きるよき日本人、よき一人の人間の育成が叫ばれている。

1. 研究の主題

児童・生徒の国際性の育成に関する研究
— 児童生徒の意識調査の分析を中心として —

2. 主題設定の理由

今、時代の変化に対応する教育が求められている。

このたびの教育課程審議会の最終答申では、①豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること。②自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること。③国民として必要とされる基礎的・基本的事項を重視し、個性を生かす教育の充実を図ることとともに、

注) 1987.9.11付 読売新聞

④国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視することをあげ、21世紀に向かって国際社会に生きる日本人を育成するという観点に立った改善のねらいを述べている。

国際理解教育については、憲法の前文、教育基本法、学校教育法でその基本的な精神について触れており、ユネスコ協同学校計画では多くの実験校でその実践研究を行ってきた。中教審もたびたび答申の中で強調してきた。しかし、今日ほどその必要性を痛感する時代はない。

閉鎖的、画一的な国民性を指摘する声は依然として少なくない。事実、考え方が柔軟でないために、外国人や帰国児童・生徒との間で誤解を生じることも多い。なかなか相手を認めようとしめない姿勢、皆と同じであるべきだという考え、こういう考え方がある限り、異った国の人々が協力して平和な社会を築くことはできないであろう。川崎市の子どもたちの国際性に対する実態を知ること。教師の指導の実態を知ること。こゝを出発点として我々は国際理解教育へのアプローチをしたいと思う。

3. 研究のねらい

まず、川崎市の児童・生徒及び教師の実態を知るために、次のような観点から迫ってみる必要があると考えた。

(1) 児童・生徒を知る手がかりとして

- ①自分の考えを自主的に表現しようとしめない傾向がないか
- ②なかなか相手を認めようとしめない傾向がないか
- ③異質なものを排除する傾向がないか
- ④他と同じであれば安心する傾向がないか
- ⑤素直さに欠ける傾向はないか
- ⑥挨拶の習慣が減ってきてはいないか
- ⑦家族における親子の絆はどうか
- ⑧外国に対する関心態度はどうか
- ⑨日本の文化についてはどういう捉え方をしているか

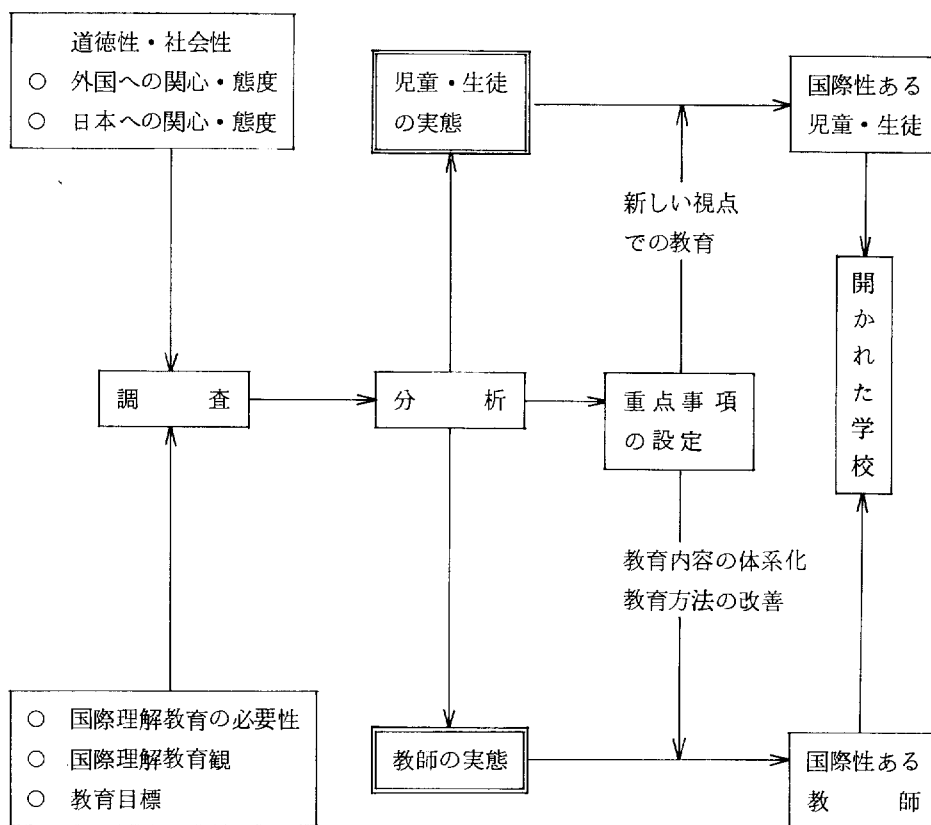
(2) 教師を知る手がかりとして

- ① 国際理解教育をどのように捉えているか
- ② 国際理解教育の実施状況
- ③ 教師の国際性に関わる児童・生徒観

これらの観点をもとに次のような調査を作成し、今後の国際理解教育展開のための基礎資料とすることを当面の研究課題とした。

- ① 児童・生徒の道徳性・社会性に関すること
- ② 児童・生徒の外国への関心態度に関すること
- ③ 児童・生徒の日本への関心態度に関すること
- ④ 教師の指導の実態に関すること

4. 研究の構造



5. 基本的な考え

(1) 国際理解教育について

国際理解教育については中教審・臨教審の答申でも時代の変化に対応する重要な教育課題とされ、教育課程審議会でも具体化に向けて去る12月答申を終えたところであるが基本的な拠り所としてユネスコ総会勧告による指導原則（1974，11月）と神奈川県国際理解教育懇話会による国際理解教育の目標を押さえておくことが重要だと思われる。

※ 国際理解のための教育政策の主要な指導原則

- ① すべての段階及び形態の教育に国際的側面と世界的視点を持たせること。
- ② すべての民族、その文化、文明、価値及び生活様式（国内の民族文化及び他国民の文化を含む）に対する理解の重要性。
- ③ 諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの認識。
- ④ 他の人々と交信する能力。
- ⑤ 権利を知るだけでなく、個人、社会集団及び国家にはそれぞれ相互に負うべき義務があることを知ること。
- ⑥ 国際的な連帯及び協力についての理解。

⑦ 一人一人が自分の属する社会、国家及び世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと。

※ 国際理解教育の目標

- ① 国際平和の重要性について認識を深めること。
- ② 他の国家、人種、民族に対する偏見、先入観念を排除して、基本的人権を尊重する態度を養うこと。
- ③ 諸外国、諸民族の文化・伝統・価値観などの理解を深めるとともに我が国の文化との共通点や違いを理解すること。
- ④ 国際的相互依存関係の増大していることについて認識を深めること。
- ⑤ 国際的協力のもとに解決しなければならない地域的規模の課題についての認識を深めること。
- ⑥ 国際協調及び国際協力についての理解と実践的態度を養うこと。
- ⑦ 外国語を話す能力など国際社会で活動できる能力を身につけること。
- ⑧ 世界の人々が日本の現状や文化などについての理解を深めること。

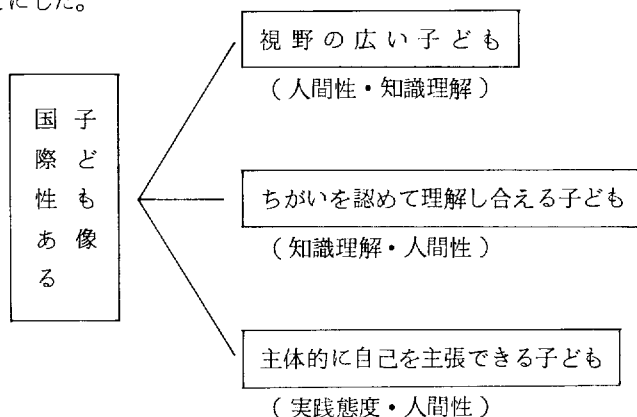
このように国際理解教育のねらいは大別すると

- (1) 人間性に関わるねらい
- (2) 知識・理解に関わるねらい
- (3) 実践・態度に関わるねらい

の三つの大切な要素を持っていると思われる。

(2) 国際性について

我々研究会議では児童・生徒の現状を検討した結果、国際性に関わる期待像を次のように描くことにした。



6. 調査の概要

※ 児童・生徒に関するもの

(1) 調査の対象

川崎市内小学校5, 6年生	807名
川崎市内中学校1, 2, 3年生	852名
計	1,659名

(2) 調査時期

昭和62年5月上旬～下旬

(3) 調査の方法

42項目からなる質問紙法

(4) 調査の内容

① 外国に対する関心度

- ・外国及び外国人に対する意識, 交流の実態, 態度
- ・外国文化に対する意識
- ・外国語に対する関心
- ・情報に関すること

② 日本に対する関心態度

- ・日本・日本人に対する意識
- ・日本文化に対する意識

③ 道徳性に関する実態

国際性に関わる価値項目として

礼儀・自主自律・責任感・思慮深さ・反省心・向上心・親切心・友情・正義・公平・公正
寛容・きまりを守る・公共心

※ 教師に関するもの

(1) 調査の対象

川崎市小学校帰国子女教育研究会 37名

(2) 調査時期

昭和62年5月上旬

(3) 調査の方法

9項目からなる質問紙法(自由記述を含む)

(4) 調査の内容

- ① 国際理解教育のイメージ
- ② 国際理解教育の必要性
- ③ 国際理解教育指導の実態
- ④ 児童・生徒観
- ⑤ 指導の手だてについて

※調査対象学年別内訳

(小学校)

	男	女	合計
5年生	195	207	402
6年生	197	208	405
合計	392	415	807

(中学校)

	男	女	合計
1年生	149	135	284
2年生	149	136	285
3年生	140	143	283
合計	438	414	852

※ 集計方法

- 単純集計
 - ・全体の傾向を分析
 - ・学年別傾向 //
 - ・男女別傾向 //
- クロス集計
 - ・二つの間の相関関係を探る
- 自由記述の分析

7. 調査結果の考察

(1) 児童・生徒に関するもの

問3. あなたは外国の友だちをほしいと思いますか。

全体では70%が欲しいと答え積極的である。男子と女子を比べると、男子60.4%に対し女子は79.6%と女子の方が多い。小6、中1は初めて学習する外国語に対する期待などから「欲しい」という答えが多いように思われる。

問4. 外国の友だちが欲しい理由を一つ選んでください。

全体の40.9%の子供達が「外国の文化や習慣を知ることができる」を挙げている。次いで28.3%の子供が「外国の友達の国へ行きたいから」を挙げている。このことから外国のことを知りたいという子供達の積極性が伺える。

学年別に見ると学年が上がるにつれ「外国語を勉強できるから」という理由より、外国に対する興味・関心を示す子どもの方が増えてきている。

問5. 外国の友達をほしくない理由を一つ選んで下さい。

全体の45.5%の子どもが「外国語を話せないから」という理由を挙げている。やはり、言葉の壁は厚いようだ。

学年別に見ると、中2,中3にかけて「外国語を話せないから」という理由は減ってきている。そのかわり「関心がない」が増えてきており、学年が進むにつれて消極的になる中学生の日常生活がうかがえる。

問6. あなたは外国の友達を持っていますか。

全体では、11.9%の子供が「持っている」と答えており、多くの子供たちが外国人の友達を持っている。国別ではアメリカが最も多く、あとは中国、韓国、カナダなど世界中にちらばり全体では30ヶ国以上も挙げている。友達になった第一の理由は「父母の知り合い」で大多数を占めていた。

問7. あなたは今までに外国の人と話をしたことがありますか。

全体で51.4%が「ある」と答えており、予想に反してかなり多い。以前より外国人と接する機会が増えたのであろう。男女差は殆ど認められなかった。

問8. もっと外国の人と話してみたいですか。

今まで外国人と話したことがある子供の74.3%が「はい」と答えている。そして、男子67.8%に対し女子81.4%と女子の方に積極性が見られる。学年別にみると中2、中3で「話してみたい」という意欲を持つ子供が少なくなっている。ここにも問5と同じような傾向が見られた。

問9. チャンスがあったら外国の人と話をしてみたいですか。

今まで外国人と話したことがない子供でも、全体の62.9%が「はい」と答え、かなり積極的である。男女別に見ると「はい」と答えた男子は53.1%、女子73.7%とここでも女子の方がかな

積極的と言える。中2, 中3については問5, 問8と同様な傾向が見られる。

問10. あなたは今、外国へ行ってみたいですか。

行きたいと答えた子供が全体で72.4%とかなり積極的である。男女別に見ると男子68.0%に対し女子76.8%と女子の方がやや多い。

また学年別では中2がやや下がっているものの学年が上がるにつれて増えてきている。

行きたい国ではアメリカが圧倒的に多く、オーストラリア, スイス, フランス, 中国と続き, ここでも30ヶ国以上の国が挙っている。

行ってみたい理由を項目別に整理すると最も多かったのが「興味・関心がある」で, 次に「自然が素晴らしいから」という理由が続いている。「いろいろな動物がいる」「歴史, 名所, 旧跡などが素晴らしい」などマスコミの影響が大きいと思われるような理由も挙げられている。

問11. あなたは今、関心を持っている国がありますか。

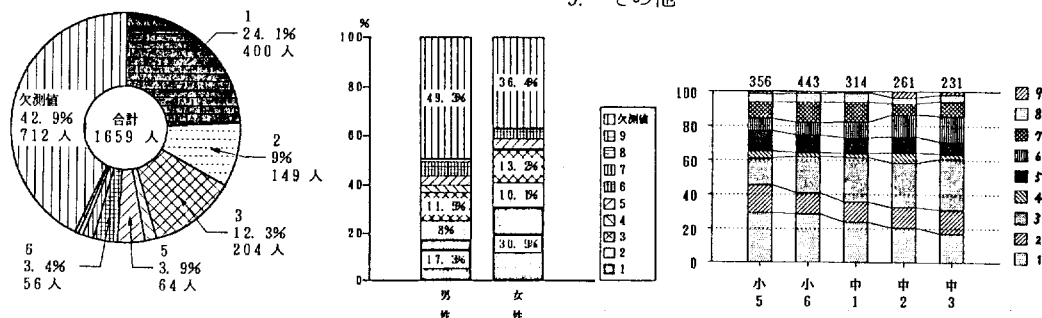
これまでの結果からもう少し多くの子供が「関心がある」と答えると予想したが, 実際には全体で47.0%とそれほど多くなかった。関心という言葉の受けとめ方が個々に違ってしまったようで意図した結果が得られなかった。

問12. あなたは外国語に関心がありますか。

「ある」と答えた子供は全体で54.5%である。男女別にみると男子47.3%に対し女子61.9%と女子の方が関心が高い。また学年別に見ると小6, 中1が問3と同じように関心が高くなっていく。このことは注目できる傾向である。

問13. それはなぜですか。

1. 外国人の人と友だちになりたいから
2. 外国の人と話したいから
3. 外国を旅行したいから
4. 外国で仕事をしたいから
5. 外国の人の考え方を理解したり, 日本のことを外国の人に理解してほしいから
6. 外国語を勉強して, より広い視野と教養を身につけたいから
7. 外国語で書いてある本や新聞等を読めるようになりたいから
8. テストでよい成績をとり, よい学校, よい会社にはいりたいから
9. その他



全体的に見ると「外国の人と友だちになりたいから」24.1%, 「外国を旅行したいから」12.3% 「外国の人と話したい」などが上位を占めている。男女別にみると「外国の人と友だちになり

たいから」は女子30.9%に対し男子は17.3%とかなり少ないのが目につく。学年別にみると「外国の人と友だちになりたいから」という理由は学年が上がるにつれて少なくなってきている。反対に、「旅行をしたい」「視野を広くしたり教養を高めたいから」という理由は学年が上がるにつれて多くなってきている。このことから学年が進むにつれ、自己の目的にそってより自分を高めたいからという気持ちが見られるようになってきている。

※一番勉強したい外国語は何ですか。

一番多いのはやはり英語であった。そしてフランス語、中国語、ドイツ語となっている。理由としては「外国人と話したいから」が第1位で、次に「世界中に通用するから」と続いている。中国語が第3位に挙げているのは注目に値する。

このことから興味・関心のある外国語に対し言葉の壁をとり除き、より知ろうとする子供達の意欲が感じられる。

問14. あなたは授業やクラブなどで、もっと外国のことや、外国と日本の関係について勉強したり知りたいと思いますか。

全体では「思うことがよくある」14.5%「ときどき思う」44.4%を合わせると58.9%の子供達が外国や外国と日本の関係を知りたいと思っていることになる。男女別にみると「ときどき思う」という男子38.2%に対し、女子50.9%と女子の方に積極的な傾向が見える。学年別にみると「思うことがある」「ときどき思う」が中2、中3で下がってくる。

問15. あなたは川崎市がアメリカのボルチモア市、中国の瀋陽市、ユーゴスラビアのリエカ市と姉妹都市であることを知っていますか。(一つだけでもよい)

「知っている」子供達は全体の28.4%である。小学生31.1%、中学生22.1%とあまり知られていないのが現状である。

問16. どうして知りましたか。

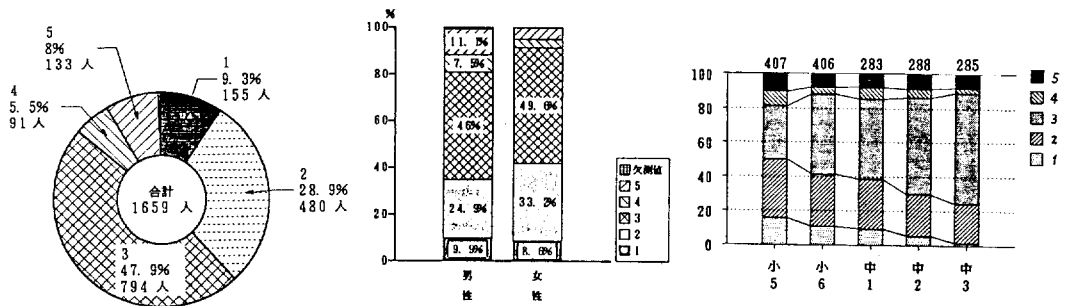
一番多いのは「学校で先生から聞いた」で15.6%の子供たちがあげている。次に「テレビ・新聞、市政だよりなどから知った」で11.0%である。「父母から聞いた」「友だちから聞いた」などは非常に少ない。

問17. ある国では、手でものを食べる習慣があります。もし、あなたがその国へ行って食事をするとき、あなたならどうしますか。

「その場になってみないと分からない」と答えた子供達が42.8%と最も多く、いかにも日本人らしい答え方である。「その国の習慣に従ってすすんで食べる」という答えが次いで多く、30.7%もあった。外国の習慣に対して否定的な見方をしていないという点で注目に値する。

問18. あなたは外国の人が道にまよって、困っているのを見かけたらどうしますか。

1. すずんで声をかけてみる。
2. 勇気をだして声をかけてみる。
3. たずねられれば教えてあげる。
4. 見て見ないふりをする。
5. 声をかけられないように、その場を立ち去る。



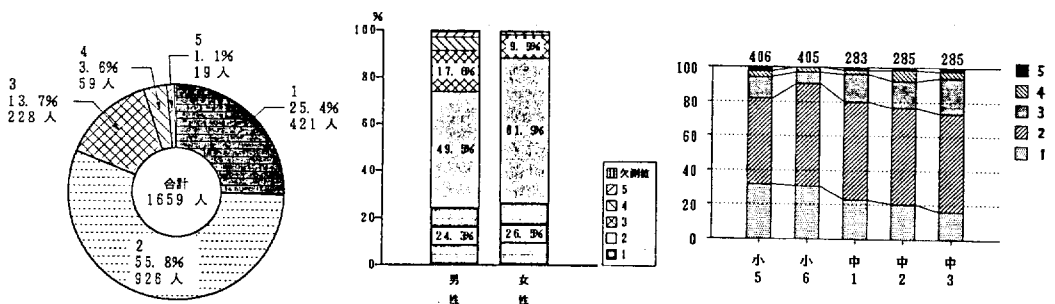
「尋ねられれば教えてあげる」が47.9%と約半数に近く、受身的な子供たちが多いといえる。「すすんで声をかける」は、男子の34.8%に対して女子は41.8%である。「見ないふりをしてその場を立ち去る」と答えた男子が18.6%に対して女子は8.7%であり、女子の方に積極的が見られた。

また、中学生よりも小学生の方が積極的であり、学年が進むにつれて「見て見ないふりをする」ようになってくる。

心の中では人助けをしたいという気持ちはあるが素直に声をかけることに対する抵抗、照れ、何も自分がやらなくてもといった心の葛藤が伺える。

問19. 外国の子供があなたのクラスに編入してきたら、あなたならどうしますか。

1. 自分からすぐ遊びにさそう。
2. 友だちといっしょに遊びにさそう。
3. 声をかけたらいっしょに遊ぶ。
4. 知らん顔をしている。
5. いじめる。



「友だちと一緒に遊びにさそう」と答えた子供が最も多く、56.0%であった。「人といっしょなら」という日本人の集団志向の特徴がよく表れている。女子にその傾向が強く、男子49.5%に対して61.9%と高い比率を示している。「自分からすぐいっしょに遊びにさそう」と答えた子どもは学年が進むにつれて減少している。わずかではあるが、「いじめる」と答えた子供がいたということは見逃してはならない事実であるように思う。

問20. 今、世界では多くの人々が飢えに苦しんでいます、このことをあなたは知っていますか。

「知っている」と答えた子供が96.3%、「知らない」と答えた子供はわずか3%という結果であった。ほとんどの子供たちがテレビ等のマスコミを通して、世界的な飢餓の状況を知っているようだ。

問21. どうして知りましたか。

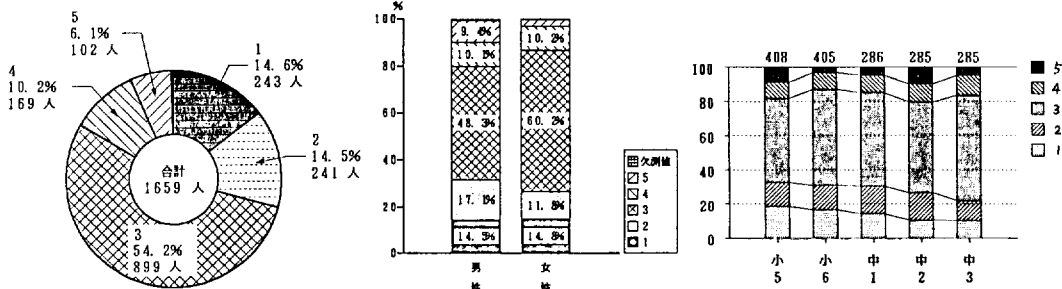
1位「テレビや新聞で知った」(55.1%) 2位「家で父母から聞いた」(25%) 3位「先生から聞いた」(16.3%) 4位「友達から聞いた」(1.75%)という順になっている。父母との会話は小学生はまだ多いが、中学生になると次第に減少しているという現実が浮かび上がってくる。「友達から聞いた」と答えた子供が少ないのは、友達同士の会話では、飢えに関するような社会的な問題があまり話題にのぼらないということが考えられる。

問22. あなたはその人達のことを知ってどう思いますか。

「せめて助けるための募金をしたい」と答えた子供が、59.3%と多く、「気の毒だと思うがどうしたらよいかわからない」と答えた子供が24.2%である。マスコミなどで、生々しい映像を目の当たりにしているので、なんとかしてあげたいという気持ちを持っているが、実際にはどのようにしたらよいかわからないという子供たちが多い。また、関心がないという子供たちは、2%と大変数が少ないという結果が出た。

問23. 外国の人達が大勢集まるようなパーティーに誘われたらどうしますか。あなたの気持ちにあてはまるものを一つ選んでください。

1. 一人でもすすんで参加したい。
2. おもしろそうなら参加する。
3. 知り合いや友達がいっしょなら参加する。
4. その場になってみないと分からない。
5. 言葉などの点で苦労しそうなので参加しない。



「一人でもすすんで参加する」「おもしろそうなら参加する」「知り合いや友達と一緒に参加する」と答えた子供を合計すると、83.8%にも上り、非常に積極的である。しかし、その中の「知り合いや友達と一緒に……」と答えた子供が54.6%と半数を越え、日本人の集団志向の傾向がはっきりと表れている。男子は自分の意志で参加しようとするものが多く、逆に女子は友達と一緒に参加するという傾向が多く見られた。学年別では、「知り合いや友達と一緒に参加する」が上級学年にいくにつれ増えている。このことから、大きくなるにつれ、自分の考えをはっきりと言わない傾向が見受けられた。

問24. 国際社会の中で日本は何をすべきだと思いますか。あなたが一番大切だと思うものを一つ選んでください。

1. 世界平和のために積極的に協力する。

2. 外国に対して技術を教えたり、お金を貸したりして援助する。
3. 日本のことだけでなく相手の国の立場を考え、つり合いのとれた貿易をする。
4. 人と人との交流をさかんにして、文化や教育の面でもっと協力しあうようにする。
5. ヨーロッパやアメリカなどの国々とのつながりを深める。
6. アジアの国々とのつながりを深める。
7. その他
8. どんなことをしたらよいか分からない。

「世界平和のために積極的に協力する」と答えた子供が30.6%、「相手の国の立場を考え、つり合いのとれた貿易をする」と答えた子供が29.8%、「人と人との交流をさかんにして、文化や教育の面で、もっと協力しあうようにする」と答えた子供が14.4%となっている。文化交流が多くなっている現在、日本の置かれている状況をよく理解していると思われる。また、この傾向は学年が進むにつれてよく表れているといえる。

問25. あなたは外国の事情を紹介するテレビの報道番組があったらどうしますか。

「心がけて自分から見ようとする」と答えた子供が20%もいることは、外国への関心が強いことを示している。しかし、「ほかに面白いアニメや劇があればそちらを見る」と答えた子供が42.2%、「家族や友達が見れば見る」と答えた子供が32.6%となっており、まだまだ面白いもの、楽しいものの魅力に負けてしまっているのが実態のようである。

問26. あなたは外国ということばを聞いたとき、どんな国がまず頭に浮かびますか。浮かんだ順に国名を三つあげてください。

- ①—アメリカ(1187) ②—中国(527) ③—フランス(393) ④—ソ連(334)
 ⑤—イギリス(276) ⑥—オーストラリア(257)

外国という言葉から思い浮かぶのは、アメリカが圧倒的に多い。次に中国・ソ連・フランス・イギリス・オーストラリアである。中国を除いてアジアの国々の名前が出てこないのは残念である。また、これらの国名があげられる要因には、マスコミの影響があることも忘れてはならないと思う。

問27. あなたは日本人だということを感じたことがありますか。

○ それはどのような時ですか。具体的に書いてください。

「ある」と答えた子供が72.5%もあり、「ない」と答えた子供が29.0%であった。意外にも日本人だ感じたことがある子供が多いたことになる。また、それはどんなときに感じたかを調べてみると、

①ことばの違い ②外国人に会ったとき、 ③食べ物や食べ方の違い、等から感じている。特徴的なことはテレビ等のマスコミを通して感じたというものがあった。日本が国際社会へ進行しつつあり、日本人を意識せざるを得ない現実を物語っているといえる。

問28. あなたは日本という国を好きですか。

「好き」と答えた子供が91.6%と、圧倒的に多い。難しい問題に直面している現在であるが、子供たちにとって日本という国はやはり、よい国という印象を持っていると思われる。男女差はほとんど見られない。しかし、学年が進むにつれて「嫌い」が少しずつ増えているが、厳しい日本の

現実を直視するあまりの結果と思われる。

問29. 日本のことを外国の人たちによく知ってもらうために、外国で紹介したいものを三つ選んでください。

1. 生け花, お茶
2. 歌舞伎
3. 盆おどり
4. 着物
5. 寿司, 刺身(和食)
6. 新聞やテレビがゆきわたっていること
7. マイコンやワープロ(コンピューターの技術)
8. 自動車
9. 新幹線
10. 塾や予備校
11. 富士山
12. すもう
13. 京都, 日光(神社やお寺)
14. 柔道, 剣道, 空手など
15. その他

〔全 体〕

1. 寿司, 刺身
2. 京都, 日光
3. 富士山
4. 着 物
5. お茶, 生け花

〔男 子〕

1. 寿司, 刺身
2. 富士山
3. 京都, 日光
4. 歌舞伎
5. 相 撲

〔女 子〕

1. 着 物
2. 京都, 日光
3. お茶, 生け花
4. 富士山
5. 寿司, 刺身

寿司, 刺身などの和食を選んだ子供たちが, 全体と男子で1位であった。京都, 日光, 富士山等の自然観光が次いで多く, お茶, 生け花, 歌舞伎などの伝統的文化などが多い。女子は着物を選んだ者が第一位で, 全体・男子で一位の寿司, 刺身が第五位だったのが特徴的である。

問30. 日本人の特徴と思われるものを次の中から選んでください。

1. 信頼できる
2. 礼儀正しい
3. 働き者
4. 金持ち
5. 心が広い
6. 親切
7. よく工夫する
8. 平和を愛する
9. 計画性がある
10. 頭がよい
11. 器用である
12. 小さいことでも気にする
13. 自分の意見を言わない
14. 自分一人では行動できない
15. 他人と同じであれば安心する。

〔全 体〕

1. 働き者
2. 平和を愛する
3. 器用である
4. 礼儀正しい
5. 他人と同じ

〔男 子〕

1. 働き者
2. 平和を愛する
3. 器用である
4. 礼儀正しい
5. 頭がよい, 他人と同じ

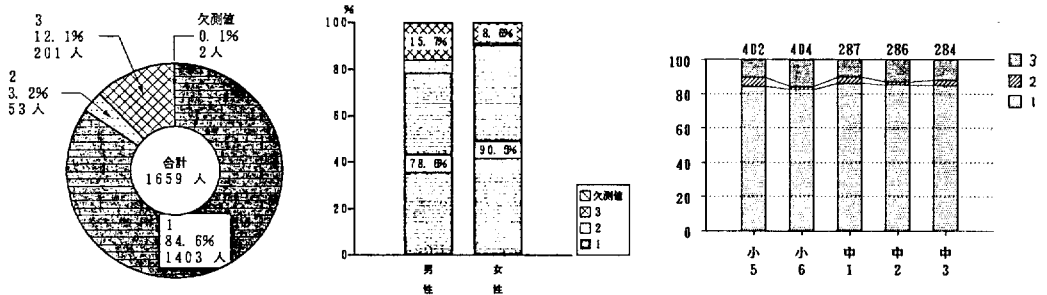
〔女 子〕

1. 働き者
2. 平和を愛する
3. 礼儀正しい
4. 器用である
5. 他人と同じ

子供たちの答えをまとめてみると, 日本人の特徴は, 「礼儀正しく」「器用で」「働き者」であり, 「平和を愛し」「他人と同じ」であればよいということになる。「他人と同じであればよい」「一人では行動できない」「小さいことでも気にする」という項目を選んでいる子供が, 学年が進むにつれて増えている。ここでも集団志向という日本人の特徴が表われている。

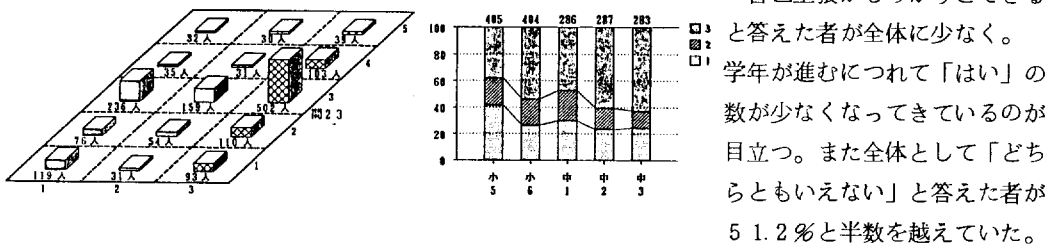
— 以下, 問31～問42の項目の解答は, 1. はい, 2. いいえ, 3. どちらともいえないの3つであり, 質問内容は, 道徳的なもので, 子供たちの社会性を問うものである。 —

問31. 近所の人や知っている人に出あったとき、あいさつをしていますか。



隣近所とのコミュニケーションが希薄な感のある現代であると思ったが、どの学年の子供も意外に挨拶を交わしている現実があるようだ。中一の生徒に「はい」と答えた者が多く、全体的に見ると、女子のほとんど(90.5%)が「はい」と答えている。

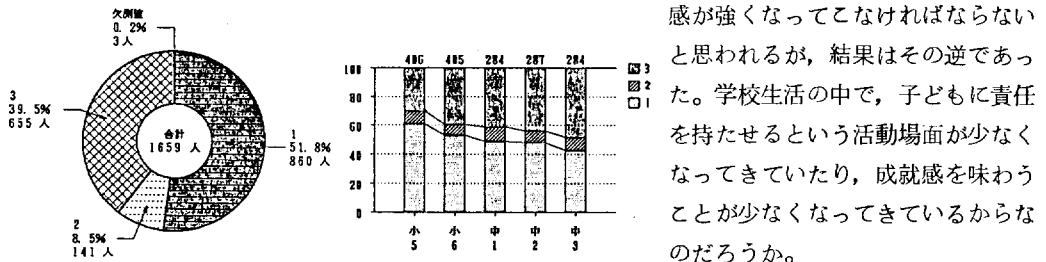
問32. 人の考えに左右されないで、自分の考えをはっきりと言えますか。



自己主張がしっかりとできると答えた者が全体に少なく。学年が進むにつれて「はい」の数が少なくなっているのが目立つ。また全体として「どちらともいえない」と答えた者が51.2%と半数を越えていた。

(問23)とのクロス集計の結果では、自分の意見をしっかりとと言える子どもは、パーティーなどにも自分から進んで参加すると答えた子どもが多く、26%を示している。また、「どちらともいえない」と答えた子どもに、パーティーなどに「友達と一緒になら…」と答えた子どもが59%を占めており、相関関係が強いようだ。

問33. 委員会などのやらなければならない仕事を最後まで責任をもってやっていますか。

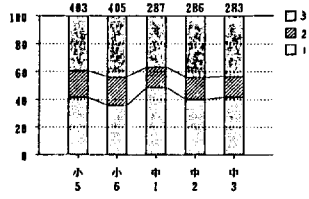
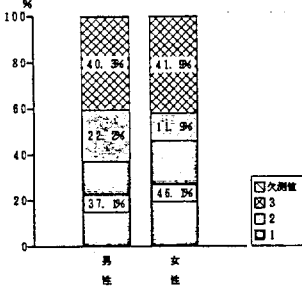


従来、学年が上がるにつれて責任感が強くなってこなければならないと思われるが、結果はその逆であった。学校生活の中で、子どもに責任を持たせるという活動場面が少なくなってきたり、成就感を味わうことが少なくなってきたりからなのだろうか。

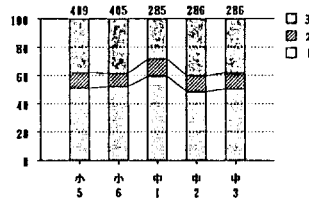
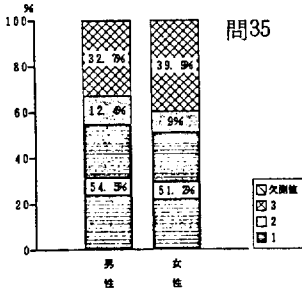
問34. 軽はずみなことを言ったり、しないようにふだんから気をつけていますか。

問31～問42までの質問の中で「はい」と答えた数が一番少ない。学年別では、中1を除いた他は「はい」が40%前後しかない。このことは、社会との関わりの中で、まわりを意識した正しい言動がとれない子どもが多いということなのだろうか。男女別にみるとその数は少ないが女子の方が慎重さがあるようだ。

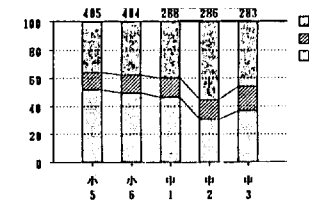
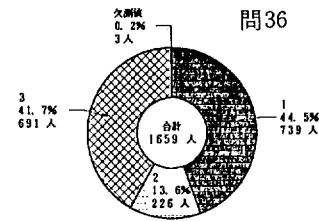
問34



問35



問36



問35. 悪いことをして、人から注意されたとき、素直にやまれると思いますか。

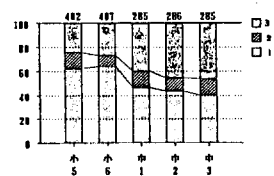
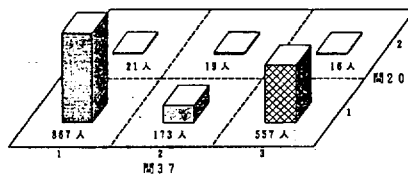
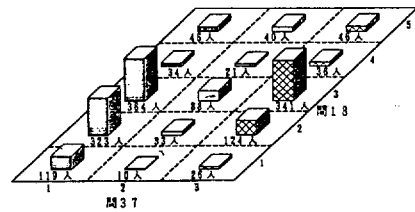
学年別にも、男女別に見てもそれぞれに差はあまり見られないが、素直な心を持った子どもが少ないのだろうか。自己防衛本能が強く、悪いことをしたのは自分だけの責任ではないという意識が強く、現代の風潮をよく反映しているようだ。

問36. 常に自分の目標を持ち、それに向かって努力しようとする気持ちがありますか。

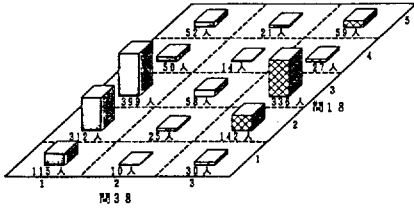
中2の結果を見ると、目標をクリアしていかこうとする態度に中だるみの傾向が見えるようだ。全体的に見ても、自分自身の目標を持って生活している子どもたちが少ないようである。

問37. 学校の休み時間などに自分の知らない子がけがをして困っていたら面倒をみてあげられますか。

小学生と中学生との差が大きい。学年が上がるにつれ「どちらともいえない」と答える子どもが多くなり、「はい」と答えたものは男子より女子の方が多かった。けがの程度によってもその対応の仕方が違ってくると思われるが、はっきりとした態度がとれない子どもが学年を迫って増えている。問18と問20とのクロスでは、自分の学校で親切にできるような子どもは外国で飢えに苦しんでいた、外国人が道に迷っているのを手助けしようとする傾向を持っているようだ。他人への思いやり、やさしさを成長するにつれ率直に表現できなくなるのは残念なことである。



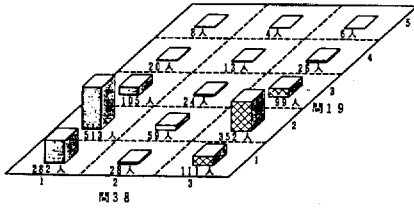
問38



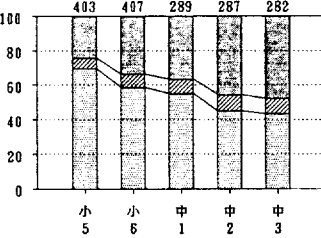
問38. 仲のよい友だちがいけないことをしているのを見かけたとき、注意してあげられますか。

「いいえ」の回答には、どの学年を見てもあまり差は見られない。「はい」、「どちらともいえない」の回答には学年の差がはっきりあるようだ。問18と問19とのクロスでは積極的という面からみると関係があるようだ。但し、友だちと一緒にならという集団志向的な面もかなり伺えるところがある。

クロス



クロス

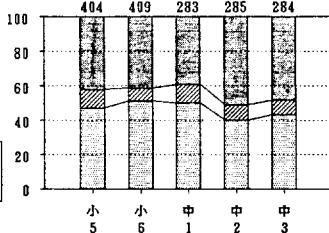
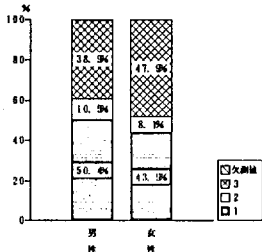


問39. 仲間はずれにしたりしないで、だれでも仲よく遊ぶことができますか。

学年別にみると、中2の「はい」と答えた

数が少ないのが目立つ。男女別で女子に「はい」が少ないのは、小集団を作り、仲間意識を持ちやすい女子の特徴を示しているようにもとれる。

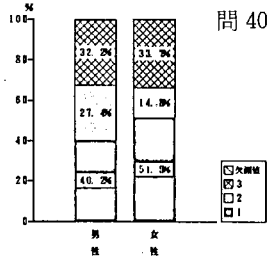
問39



問39 クロス

大切にしていたものと、それへの価値感のちがいでよってかなり個々の条件には差があるようだ。男女別では、「はい」と答えたものについてみると、男子4.0.2%に対して女子5.1.5%という数値の差は、やはり男女の性差にその原因が伺えるようだ。

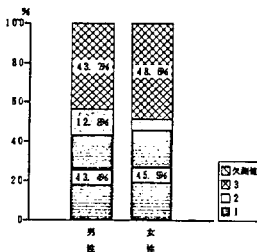
問40. とても大切にしていたものを友だちがまちがってこわしたとき、許してあげられますか。



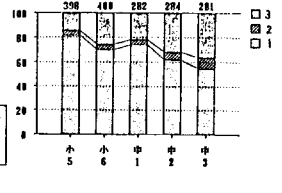
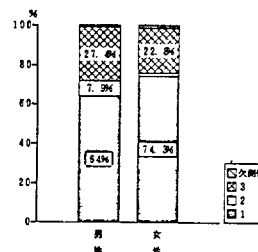
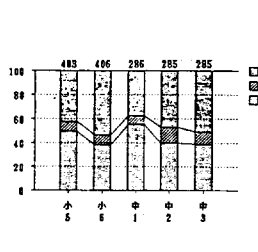
問41. 学校の規則やみんなで決めたままりなどは守るようにしていますか。

男女別にはあまり大きな差はないが、学年別では中1の結果が興味深い。入学当初の意欲の表れか、他学年に比べきまりを守ろうとする前向きな姿勢が読み取れるようだ。

問41



問42



問42. 学校のものなど、みんなで使うものは大切に使うように心がけていますか。

学年が上がるにつれ、「はい」と答える子どもが減ってきているのは、やはり前出の問題傾向と同じようだ。公共心がなくなっていくのは問題である。ただ、全体的にみると男子64%、女子74.3%と、約半数以上の子どもに「はい」という答えがみえ、「いいえ」と答えた女子が3%弱であったことは特筆すべきであろう。

(2) 教師に関するもの

問1. 国際理解教育のイメージ

○ 人間性に関わる表現

やさしさ、思いやり、感動する心、リラックス、世界的視野、心のゆとり、人類皆兄弟

○ 知識理解に関わる表現

異文化を知る、認める、理解する、外国との相互理解、人間理解、国際的つながり

○ 態度に関わる表現

相手の立場を考え自己主張できる、帰国子女、外国人との交流、相互協力、共存

○ 指導に関わる表現

全人教育、全教育活動で指導すべきもの、日本の教育の欠点を知る

問2. 日常の教育活動に国際理解教育は必要か。 問3. その理由

圧倒的に「はい」が多く、その必要性は万人が認めるところである。理由としては、「帰国子女の対応のむずかしさ」「外国の習慣や考え方を知る必要性」「国際感覚のなさを痛感している」「国際社会における日本の立場」「時代への対応」等が挙げられている。

問4. 国際理解教育が学校の重点目標になっているか。

21.6%が「はい」と答えているにすぎず、「いいえ」「どちらともいえない」を合わせると、78.4%が目標として意識されていない。

問5. 国際理解教育を意識して指導していますか。 問6. 指導の場合

帰国子女教育担当者が殆どであるにもかかわらず、35.1%があいまいなのは残念である。指導の場は「児童に接するあらゆる場面で」「社会、道徳、国語」「学級指導」「集会の時」「体育、音楽」等全教育活動に及んでいる。

問7. 子どもたちに国際性があるか。 問8. どういう場面でそう思うか。

「はい」と答えた教師は16.2%で国際性がまだまだ足りない子どもたちの現状を示している。場面については殆どが無回答であるが、「全てが同じでなければならないと思っている子ども」「情報は知っているが表面的にすぎない」等の指摘がある。「昔より意欲的に外国を知ろうとする姿勢を持っている」と評価しているものもある。

問9. 国際性のある子どもを育てるてでは

問1とかなり重複するが、ここでは指導に関わる積極的な発言が多い。

○ 教師自身の国際性が必要である。

○ 自己主張ができる場面も数多く設定する。

- 「海外から見た日本」「日本から見た外国」などの教材を充実し、教育課程に位置づける。
- 帰国子女、外国人等との交流を通して相互理解を図れる場を作る。
- 教師、父母への啓蒙を図ること。

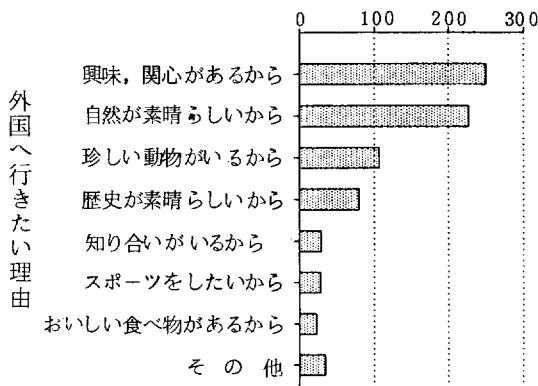
8. ま と め

※ 外国及び外国人に関すること

(1) 外国人に対する意識

外国人の友だちが欲しいと答えたものが70%もあり、外国人に接してみたいという気持を強く持っている。現在、外国人の友だちを持っているものが予想外に多く10人に1人はいることになる。外国人と直接話をしたことのあるものが全体の約半数もあり、また、チャンスがあったら外国人と話してみたいと考えているものも多い。子どもたちは今までになかった国際化社会の中で生活しており、これらの子どもたちの積極的な面を大いに伸ばしうる条件がそろいつゝあるといえる。しかし、道に迷っている外国人への対応、外国人が主催するパーティーへの参加等、実際の場面での反応は学年が進むにつれて消極的になり、人と一緒ならという集団志向的傾向が表れてくるのでは問題である。

(2) 外国に対する意識



日本とちがった自然、文化などに興味を感じ、外国へ行ってみたいと積極的に考えているものが多い。しかし、単なるあこがれを感じているだけの子どもたちが多く、しっかりとした目的意識を持っておらず、興味はあるが、その国に対して関心を示すところまでは高まっていない。外国という言葉から連想される国は殆どがアメリカである。中国を除いてアジアの国々が挙がってこないのは残念である。大国志向が見られる中でオーストラリアが挙がってきてい

るのは近年の日本との密接な経済関係やコアラなどの動物ブームの影響のためであろう。

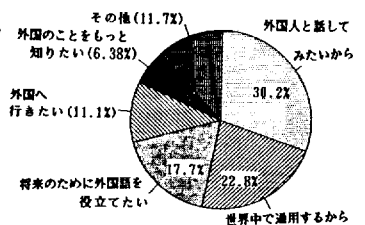
(3) 外国文化、習慣に対する態度

外国の文化については、実際に外国に行つて自分の目で歴史、名所、旧跡などを訪ねてみたいと考えているものが多い。この傾向は学年が進むにつれて強くなっている。外国の習慣については、物の見方、考え方がちがうのとまどいを感じるのは当然であるが、進取の精神という面から考えると「その場になってみないと分らない」という答えに物足りなさを感じる。しかし、「その国の習慣に従つて進んで食べる」と答えた男子が多かったことは心強い。

(4) 外国語に対する関心

全体の半数をこえるものが外国語に対する強い関心を示している。学年別にみると小6、中1の関心の高さが目立つ。学年が進むにつれて自分の目的にそつてより自分を高めたいという気持が強くなり、興味、関心のある外国に対し、より知ろうとする子どもたちの意欲が感じられる。一番勉強したい外国語は、英語、フランス語、中国語、ドイツ語という順になっている。中国語が第3位に挙がってい

外国語を勉強したい理由



るのは注目に値する。

※ 日本に対する意識

(1) 日本に対する意識

日常生活において子どもたちは、街中や乗り物の中で外国人に出会うことは珍しいことではなくまた、マスコミを通じいろいろな国の情報もよく知っている。それで、子どもたちはことばのちがいが、容姿のちがいが、食べ物、文化のちがいが等を認識し、「自分たちは日本人である」と感じる人が多いのであろう。こういうことを踏まえた上で90%以上の子どもたちが日本が好きであると思っている。問22、問24の結果からも分るように子どもたちに国際社会における日本の地位、状況をよく理解し、日本人ということに誇りと自信を持っていると言ってよいのではないだろうか。条件としては国際理解教育を進める土台はできていると言える。

(2) 日本人に対する意識

日本人の捉え方は、「働き者」「礼儀正しい」「器用である」「平和を愛する」など一般的に言われているのとは同様である。ただ、気になるのは「人と同じであればよい」「ひとりで行動できない」という項目が学年が進むにつれて増えていることである。このことに、外国人が多く集まるパーティーへの参加、クラスに外国人の友だちが編入してきたときの遊びの誘い方等によく表れている。また、自分の考え方を問われる問31～問42で「どちらともいえない」の答えがかなり多いこと等にもそのことが言える。これは、我々がねらっている「異質なものを認め、主体的に自己主張できる子ども」からかなりずれており、これからの重要な課題となる。

(3) 日本文化に対する意識

外国に対して紹介したいものに「寿司・刺身」の食べ物、京都、日光、富士山の名所、景勝地を先ず挙げている。さらに着物、お茶、生花と続いているが、これらの伝統文化については、日常生活ではなじみが薄いので表面的な知識しかなく、具体的に紹介できる子どもは少ないのではないだろうか。こういう古来の文化の精神に触れる機会が一般的に少なくなっているのは残念なことである。しかし、子どもたちは日本独特の文化をきちんと捉えていると言えよう。今後これらの文化に触れる機会をもっと増やしてやることも考えていいのではないだろうか。

※ 道徳性に関する実態

子どもたちの日常の学校生活は必要以上にまわりの目（友だちの反応）を気にしているところがある。知識としては道徳的であっても、実際の場面でなかなか素直に表現できないことが多いようである。また、謙虚さ、相手を思いやる気持が国際理解には不可欠のはずであるが、結果をみると年齢が上がるにつれて減っていく。これらの子どもたちが自分に対して自信を持っていなかったり社会に対する責任感のなさがその原因として考えられるのではないだろうか。しかし、予想以上に子どもたちがあいさつをきちんとしていることは喜ぶべきことである。

※ 教師に関すること

教師は子どもたちに国際性が不足していると指摘している。教師の描く国際理解教育のイメージは真剣だ。広い視野から指導しようという姿勢が伺える。ただ、学校としての目標の中に意識されていない面がまだあるようだ。時代の変化に対応する教育目標とは……一考を要する課題であろう。

9. 今後の課題

今回の調査によって児童・生徒の実態、教師の実態がある程度明らかになった。このことをもとにして研究の方向を踏まえ、次に挙げることを今後の課題としたい。

- (1) 教育課程の中に新たに国際理解教育を加えるという視点ではなく、国際的な視野から教育活動を見直し、国際理解教育としての体系化を図る。
- (2) 教材の検討を行い、効果的な教材の開発と配列を考える。
- (3) 教育方法の研究と並行して授業研究を実践していく。

おわりに

帰国子女や外国籍子女に対するいじめはもはやなくなったと信じたい。しかし、現実はずしもそうとはいえない。異質の人間を疎外しようという土壌が日本人の中に未だにあるとしたら、それは実に悲しいことである。どこの国の人であれ、どんな人間であれ人から尊重される権利を持っている。国際理解教育は人権尊重教育の延長上にある。人と人とのちがいを、国と国とのちがいを当然のこととして認め、人を理解し、国を理解し、平和な社会を実現しようという意欲あふれた子どもたちを育成することはこれからの教育の責任であるといえよう。

今回の調査項目の設定に当っては神奈川県立教育センターで先に実施したものを参考にさせていただいた部分も多い。また調査の実施に当っては該当校の校長先生をはじめ、諸先生方及び児童・生徒の皆さんのご協力を得た。こゝに深甚なる謝意を表したい。

・参考文献

- 1) 中西晃, 野田一郎他「国際化時代の教育」創友社
- 2) 奥田真丈他「国際理解教育の手引」神奈川県教育委員会
- 3) 溝上 泰他「中等教育資料」文部省昭和55年1月号
- 4) 木田 宏他「中等教育資料」文部省昭和57年8月号
- 5) 磯村尚徳他「中等教育資料」文部省昭和59年1月号
- 6) 生江義男他「中等教育資料」文部省昭和61年1月号
- 7) 小林哲也他「文部時報」文部大臣官房昭和61年1月号
- 8) 国際理解教育研究会他「教育と文化」神奈川県立教育センター昭和61年3月
- 9) 原 豊他「教育と文化」神奈川県立教育センター昭和61年9月

・指導助言者

川崎市立稲田小学校長	松尾 桂一先生	川崎市立長沢中学校長	小作 順一先生
川崎市立今井中学校長	芳賀 学人先生	川崎市教育委員会指導主事	城田 勝也先生